

祖父母の語り聞かせの教育

—戦前期の安芸門徒家庭のばあい—

古 川 和 子

- 一、はじめに
- 二、祖父の語り聞かせ
- 三、祖母の語り聞かせ
- 四、安芸門徒家庭
- 五、あそび歌
- 六、祖母の国語教育
- 七、参考資料—叔父・叔母・父の語りと文章—
- 八、おわりに

一、はじめに

同じ乳房の兄弟話

ひとが聞いたらうれしかろ

親が聞いたらうれしかろ（祖母の語り）

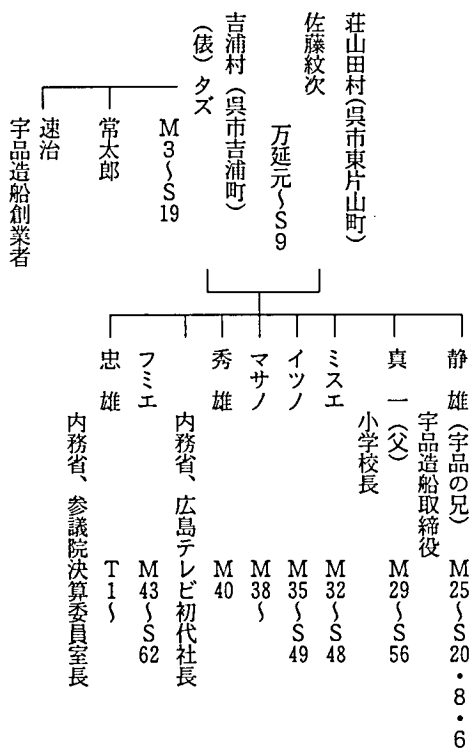
父の八人の兄弟姉妹は仲のよいのが自慢で、何かにつけて寄り集まっては話に花を咲かせていた。その話のにぎやかさ、描写の

あざやかさは傍で聞いていて楽しく魅きつけられた。今から三十年前、野地潤家先生の言語教育の講義をうけていた私は、祖母もきくと話上手だったのだから、それは熱心なお寺参りのせいだろうかと考へながら耳を傾けていた。その頃から祖父母の語り聞かせのことばや格言を集めたいと思っていたが、数が少く、アンケートをとることもためらわれ、またまらないまま月日が過ぎた。心がけてきたことは、戦前期の安芸門徒家庭の一つに望遠レンズを当てるように、できるだけ具体的な話しことばなどを集めることであった。

これらの収集を通して、一つの家庭における言葉環境や言語教育、更には家庭教育の一端をとらえ、家庭における言語教育のあり方を考える一助ともしたい。

二、祖父の語り聞かせ

はじめに、家族の系図をかかげておく。



祖父は若い頃は農業に従事し、中年から地方銀行に勤めた。祖父のよく口にしていた格言もしくは格言めいたことはや手紙の中から、人間の生き方や生活のあり方を教えたことばを拾い出してみよう。

1、教えさとすことば・格言

① 高帆を巻くなよ
 自分の「分」を守る。分不相応に派手なことをすると船がひっくり返る。

② 糸尻三尺出すなよ

たこあげの糸はゆとりを残す。生計も。

③ 一銭軽(かろ)からず百銭重からず

平素はつめの先に灯をともしようと仕末しても、寺への寄付等大事なときには金を惜しまない。道具を買う時は長持ちするような良質のものを買う。

④ ものの命を生かす。紙切れ一つでも大切に使う。

⑤ ぜいたくをすると人間がだれる。

⑥ 金に親子はないけん、兄弟といえども金を貸したり判をついたりしてはいけない。

⑦ 親の意見となすびの花は千に一つのあだがない。
⑧ いつのまにかは年老の積もるらんとも覚えず知らざりき。
人の世はあつという間、短かくはかないもの。急いで法を聞き永遠に生きる世界を求めよ。(秀雄叔父)

⑨ 誠を知ったことと、それを待たことは違う。苦勞してこれを体得して身に行うことが大切。(同)

⑩ 論語読みの論語知らず
大学出を鼻にかけようではだめだ。(同)

⑪ 勉強でも仕事でも、苦勞は買うてもせい。
艱難汝を玉にす(同)

⑫ よう舞わん舞いは先に舞え
自分を過信しない謙虚さが大切で、積極的に事を敏にするのが自分を生かす(同)

⑬ 百姓上手の秘訣は三日早作
⑭ ものはそこそこに置け。わしらは盲目でもタバコ盆がどこにあるかわかる。

⑮ 戸の開けたては音があまりしないようにやれ。
⑯ 「うちの兄は親まさりじゃけん。」

長男が働き者で弟妹のめんどうをみるのを喜んだ。伯父は生涯造船の仕事に携わった。若い頃は祖母の弟常太郎の経営する吉浦造船で朝早くから働いた。呉浦も吉浦も昔から良き港だった。南

西は倉橋島・江田島、あとの三方は山々に囲まれて大風から守られ、太田川のような中国山地の土石を運んでくる川がないので海

が深い。

2、手紙
昭和のはじめ頃、東京で勉強中の秀雄叔父へ書かれた手紙で、四分の一に切ったワラ半紙に書いてあった。

秀雄叔父
悪に思想にかかれな
學文、身ノタメ
先祖兄弟
親類遠モ極カサタノ存
眞ヲ用心
儉約
父ヨリ

三、祖母の語り聞かせ

祖母の父は大工の棟梁だった、近所の子供を集めて論語を教えていたという。もちろん祖母もその中にいた。論語の話を書く幼い姿と、後年熱心に聴聞する姿が私の頭の中で重なる。嫁いできて、しゅうとが儒教思想を身につけていたので話が合ったという。

1、会話文、話しことばの再現

1、会話文、話しことばの再現

1、会話文、話しことばの再現

1、会話文、話しことばの再現

1、会話文、話しことばの再現

1、会話文、話しことばの再現

1、会話文、話しことばの再現

1、会話文、話しことばの再現

1、会話文、話しことばの再現

1、会話文、話しことばの再現

① 「おごうや、おごうや。(おごうさん・奥さん)

日暮れもとにゃあ、どこの家でも忙しかろうに。」

お寺参りに理解のあつたしゅうとがありがたいといつも話していた。

これは一度だけ注意された時のことば。父もよく話していた。

② 「なした遠い所に醬油屋さんがあるんですのう。」

約百年前、田んぼの中を空の醬油びんを持って遠くのお寺の方へ急いでいると、知人が笑いながら話しかけた。嫁いできて当分はお寺参りも遠慮しながらであつたらしい。

③ 曾祖母「ターや、お前も苦勞するのう。」祖母「いいや。

平生はそうでもないんよ。それに、我が子じゃに。」

小学生頃の父が台所の板間にひっくり返って、足で戸棚の引戸を「ズデドン　ズデドン」と叩いて「のうやあ、のうやあ」と駄々をこねたとき、来合せていた曾祖母と交した会話である。できのいい兄とたくさんの弟妹にはさまれて淋しかったのだらう、父はよく駄々をこねたらしい。父はこの時の記憶が鮮明で感慨を持ち続けていたのだらう、またかと思うほど度々話していた。

④ 同じ頃、お盆に祖母が里に行つて、先に来ている父の姿を

さがして

「真一はどこへ行きましたか。」

「さわ松ツァンと連れもつて踊りに行きましたわい。」

父は休暇になって吉浦の母の里へ行くと人が変わったようにいい子をしてた。遊び友達もいて、たもとの長いゆかたを着て踊

りに行つた。盆踊りは朝まで行なわれた。

2、抑揚のある語り・歌

① アーキーカゼガ　フイテキタ

オーヤーマーサンスケサン(秋風が吹いてきた。大山三助さん。)

秋を迎える準備、例えば着物の洗い張り、仕立て、布団の打替、洗濯などに取りかかるのを促す歌である。叔母たちは少女時代、二河川へふとんの側の洗濯に行つた。岩の上に広げて乾かす間、泳いだり、川エビを砂で築いたいけすに入れて遊んだ。

私は(姉や兄も)単純に季節の歌としてうたっていて、お盆を過ぎた頃、夕風が終つて裏の井戸端から涼しい風が吹いてくると、「アーキーカゼガ　フイテキタ」とうたつた。

父は出費がかさんで懐具合がさみしくなると、「アーキーカゼガ　フイテキタ」とうたつた。簡単なこの歌は、いろいろな場面で、例えば人間関係などにも使われながら、古くから歌い継がれてきたのではないだらうか。

② なでしこの　花におろかほなけれども

遅れ咲く花　愛らしや

古い今様だらうか。父は私に「おばあさんがよう言いよりんさつたで。なでしこの末に花咲く愛らしや」とうたつた。私も末っ子にこの歌をうたつてやったが、四歳頃になると「またそれ言う。言うなや。」と文句を言いだしたので、「なでしこの遅れ咲く花　愛らしや」と短くした。

③ 水仙の根に力瘤を持ちながら

はっちと聞く花のやさしさ

ミスエ叔母には生涯の指針となった歌である。「この歌は私の母も佐藤の祖母から教わった歌だそうで、かぼそく弱々しくさえ見えるあの水仙の花が厳寒時、寒風に耐えてパッチリとした花を咲かせることができるのは、根に大きな力瘤があるからですよ。女はやさしくしかも力瘤を持つ水仙の花のようではなくてはならない。とそんな意味のことを話し聞かせてくれました。一時、私が帰国しました際、母の大切なものが納められているタンスの引き出しを開けたところ、茶色の封筒に何かの雑誌から切取ったのでしよう、水仙の絵が張ってあり前述の歌が母の文字で記されておりました。いかにも母らしく思わず涙ぐんでしまいました。

(桐原武子「我が母・その思い出の記」)

④ 同じ乳房の兄弟話

ひとが聞いたら おかしかる

親が聞いたら うれしかろ

イツノ叔母「おばあさんがよう言いよっちゃったが、兄弟が集まって話するのはええもんじゃわいね、和子ちゃん。」

⑤ 「つらや、なまけや、ばばさんや。」

うらの小川に 子を捨てた。」

「男の子かや、おなごかや。」

「そうじゃあ あるかや、イモの子よう。」

戦災前は従姉たちがよく泊りに来た。夜寝床に入って話をしてみらうのが楽しみだった。節まわしとオチがおもしろいと笑いこらげていたけれど、マサノ叔母も、一緒に暮した姉たちも祖母か

らは聞いていない。上の二人の娘だけに話したものと思われる。

⑥ 阿波浄瑠璃の語り

傾城阿波鳴門から巡礼お鶴の話

「チリン チリン」

「どれどれ 御報謝進せましよう。」

「父の名は何といやるかえ。」

「阿波の徳島十郎兵衛」

「かかさんの名は。」「お弓と申します。」

「野に寝たり、山に寝たり、軒の下に寝ては叩かれたり

……」

哀れな節回しで語ると姉たちは涙をこぼして聞いていた。「おばあちゃん、チリンチリンやってえや。」とせがんだ。

ミスエ叔母も同じように娘や孫に語って聞かせた。ある孫娘は涙を見られるのが恥かしいので顔はこたつの中に入れて聞いていた。平素もよく浄瑠璃口調で会話をした。お茶を飲みに入れて「こーこは来たことあるわいなあ。」

忠臣蔵

「そこへ行くのは おかるじゃないか。」

「わたしや売られて行くわいなあ。」

「運かりし由良之助。」

マサノ叔母の話によると、祖母の弟常太郎が阿波浄瑠璃が好きだったそう。語りの山場になると見台に扇子を立ててひざ立ちして語ったという。常太郎が練習するのを隣の部屋で母親や姉が聞いていたのだろう。ある時「今のは上手に語れたけん、さぞか

し隣の部屋では感心して涙を流しとるじゃろう思うて、襖を開けたら誰もおらだった。」と言って笑わせた。

3、教えさすことは・ほめことは

① 「そのイソモはすぐに川原石へ戻してこい。」

海岸から三つ四つ小貝を拾って帰った小さい頃のイツノ・ミスエ叔母を叱って言ったことばである。イツノ叔母に「おばあさんにいろいろ言われた話の中で特に印象に残っているのは？」と正面切つてたずねた時答えてくれた。

② 「お前は子を育てるんじゃあない。子が育つんじや。」

乳母車の中に赤ん坊を入れたまま忘れていたイツノ叔母に言った。これは嫁としてみんなの世話をしていた母が聞きとったことばである。私は小学校高学年の頃、「育つ」「育てる」の違いをおもしろく思った。国語のおもしろさに目ざめたと言ってもよい。この時のことを叔母は中国新聞の「こだま」欄に投稿している。(参考資料3)

③ 「西向け言うたら三年でも向いとる」そんな性根のない人間ではいけない。

④ よう舞わん舞いは先に舞え

家庭内の行事があるときは早く段取りにかかるように教えた。

⑤ 朱に交われれば赤くなる

悪い友達と遊ばないようにしました。二番目の姉が小学生の頃(昭和十年代のはじめ)、海軍士官や工廠の技師など「旅の者」の家に遊びに行くと、「高歩きをする」と言って嫌った。軍都として発展していた呉は人口の流入が激しかった。(戦艦「大

和」は昭和十二年十一月起工、十五年八月八日進水式)祖母は共同体意識が強かったので、莊山田村の「地の者」の、信仰に重きを置く価値観や質素儉約に励む生活信条が乱れるのではないかと危機感を抱いたのだろう、姉のいろいろな話からそれが伺える。

⑥ 「一羽の雁が飛び立ちゃあ、あとの雁も連ろうて飛び立つ。」

長男が出来がよく、弟たちも酒・タバコを飲まずまじめなのを喜んで雁にたとえた。そのうち次男であるが父がお酒を飲みだしたので、「せっかくええがにいきよったのに、カー、二番目の雁が脇へそれた。」と言った。

⑦ できた できたよ 字品の兄は

親にまざった(オハラハー)子でござる

オハラ節の替歌で歌った。

⑧ 「あの子の親衆はうれしかろうに。」

イツノ叔母が学芸会で理科の発表をした時、周囲の人が話していたのでうれしかった。

4、法文の語り・その他

① いつのまにかは年老の積もるらんとも覚えず知らざりき

② 「のう、ミスエや。女は嫁に行ったら、法を聞かしてもうて、腹いっぱい食べらしてもうたら、それだけで幸

せと思わんにゃあいけん。」

心に残ることばとしてミスエ叔母が話してくれた。「真宗どころ」広村では、村をあげて聴聞に熱心だった。」

③ 「余宗はああいうことを言うが、真宗は、クスは言わ

ん。」

曆・星・占・縁起・家相・方角などは迷信として否定。「みんなの都合のいい日が大安」

④ 「縁がなけりゃあ、その土地は踏めん。」

近代以前の呉地方の庶民の言語生活は、お説教を「聞かせてもらう」生活が中心であったから、今日想像する以上に正確に聞き取る訓練ができていたし、わかりやすく印象的に話す力が育っていたように思う。

四、安芸門徒家庭

父たちは熱心な安芸門徒の家に生まれたことに誇りを持っていた。信仰心と両親への敬慕が一体になっているように思われた。安芸門徒とは何なのかという興味も感じた。父たちは夕食前一家揃って仏前に参り、祖父があげるお経、親鸞上人の正信偈（「教行信証」の精髓）と蓮如上人の御文章を聞いた。正信偈は子供の時から暗記させられたという。

裏座敷の真ん中に「なかえ（中の間）」とよばれる他人が入ってこない部屋があって、着替えをしたり、昼寝をしたりしていたが、私達きょうだいは「夜ざるひき」と叱られながら、夜遅くまで話をした。親類の噂話、叔父叔母の若い頃の話、女学校の先生や花形嬢の話。狐の嫁入りをどこの誰が確かに見たという話。わら人形に五寸くぎを打つ話。

北陸仏教説話の肉づきの面の話は何度も聞いた。祖母がせがまれては話していたという。北陸に信心深い嫁がいて、夜、山を越えては隣村までお説教を聞きに行った。それをねたんだ姑が、じやまをしようと山道で鬼の面をかぶって待ちうけおどかし、嫁はひるまず寺参りを続けた。いつものように嫁をおどかし、さて面を取ろうとしたがどうしても取れない。狂ったように無理やり取ったら顔がはがれて面についてしまった。今でも北陸にはその肉づきの面があるそうという話である。

子供は怖い話が好きで、ひとだまの話はよくしたものだ。遊廓の娼妓が三人、川端で夕涼みをしていたら、火の玉が流れていったので腰を抜かしたという話。父母は、「あれは燐が燃えるんだよ。」と言ったが、霊魂の話とが縁起をかつぐ話になると、「真宗はクスは言わん。」と叱った。

安芸門徒とは何なのか、これからも問い続けたい問題であるが、家庭における宗教的なしつけとしては、「教生をしない」「感謝の気持を持つ」「迷信の否定」の三つの柱があったと思う。

五、あそび歌

いとこ達が来て遊び手が揃うと、戸外では叔父たちを中心に陣取りやハネつきで遊び、冬の室内ではこたつで女の子を中心にあそび歌をうたった。

① 羅漢サンガ揃タラソロソロ廻ソジャナイカヨイヨサノヨイ

ヨサ／＼

前の人の所作をまね、自分の所作は次の人に廻す。

② 次の③の歌と同じで、左右の手を夫々輪にして前へ出すと歌い手が指でなぞっていく。歌の最後に当たった人が鬼である。

イッポカッポ豆タカヨダカ
サイタカサカカ油シメコシメ

兄弟仲ヨクナールテント

モヒトツオマケニナールテント／＼

③ ズイズイズッコロバシゴマミソズイ

茶ツボニオワレテトッピンシャン

ヌケターラドンドコシヨ

俵ノネズミガ米クテチュー／＼

オトサンガヨンデモオカサンガヨンデモ

イキッコナーシ

井戸ノマワリデオ茶ワンカイタノダール

④ ユウベノ火車ハ

付ケ火カ 出火カ

デビ デビ デビヨ

これはあそび歌ではなく、額が出ているのをからかう歌である。

⑤ 「私が子供の頃、運動会で墨を体中に塗って『ゲイシュゲイシュゲイシュ アサノサンワ、ケチナトローノサーマヨー』という俗謡をうたってカッパ踊りを踊ったもの

であるが、」（佐藤忠雄「画廊にて」）

⑥ キジャトンビヤオジャラメガ

アツチャツキコツチャツキイタシマス

これは賀茂郡河内町河戸村出身の母がうたっていた歌の一部である。山あいの村で歌われたものか、山陽道を行き交う旅の僧が歌ったものか。叔母たちは知らない。呉は海上交通が主であり、交通網が違っていたのだろう。

六、祖母の国語教育

祖母にとってお寺参りは生涯教育であり、つきあいの場であり、精神生活のすべてであった。八人の子供を育てながら毎日のように子供を連れてお寺へ参った。子供が大きくなると夕食の時、その日のお説教を話し聞かせた。それらのことが毎日の国語教育になったと思われる。お説教の内容はよくわからないが、教義・宗義・生き方・実生活のあり方・説話・芸能にいたるまで、多種多様であったようだ。記憶に残っているものは説話が多い。マサノ叔母の記憶に残っているのは、ある農家の嫁が自分ほど不仕合せな者はいないと思いつつながら畦道を歩いていると、蛙が「ガオレ ガオレ／＼」と鳴いたので、ああ、自分も我を張りすぎた、我を折らねばならぬと反省した話とか、やはり蛙が「ココロカラ ココロカラ」と鳴いた話である。江波のおさん狐の民話も聞いたという。

ミスエ叔母も因縁話や説話を話している。末っ子が四、五歳の

頃、お風呂に入らないと言いつ張ったとき聞かせた話は、「昔およねという心やさしい女中がおつたそう。毎日ひきがえるが流し場に出て来たそう。およねは自分の少ない食べものの中からおよねをやって来たそう。ある寒い冬の日、およねはカゼを引いてぼっくり死んだそう。その日から、ひきがえるは流し場には現われなくなったそう。」従妹は怖くなって、「入る、入る。」と言ってお風呂に入った。

また、次のような話も聞かせている。

子供を亡くした母親が半狂乱になってお釈迦様に我が子の命をとり戻してほしいと頼み込んだ。お釈迦様は、家々を回ってケシつづを三つづつもらってくるように、ただし死者をだしてはいない家に限ると言われた。母親は必死になって訪ね歩いたが、行けども行けども死者を出していない家はなかった。とつぷりと日が暮れて、家々の灯りがともるのを見ながら、誰の身の上にも死はやってくる。我が子とてのがれることはできないのだと悟り、子の命をとり戻すことは諦めた。この話は、マサ叔母は聞いたことがないという。

これに似た話がアンデルセン童話の中にある。「ある母親の物語」であるが、幼な子を死神に連れ去られた母親が、わが子を取り戻そうと、いばらの道で血を流し、両眼や黒髪を失いながらどこまでも追って行くが、最後には「神のみ心のままに」と諦める話である。

母が嫁いできてからは、お寺から帰ると身振り手振りをまげながら話し聞かせた。「寺へ来たならナムマイダブ ナムマイダブ言

うて挿んでも（両手を合わせ）、家へ帰ったら嫁をいびるんじやろうが（両方の人さし指を立てて鬼のまねをする）。「これは落語の動きに似ている。落語は江戸時代、お説教から派生したものである。」

母の話によると、祖母は同行をふやすことにも熱心で、ばら寿司や煮しめをつくと皿に取分けて、「これを持ってさそうて来う。」と言ってお寺参りにさそいに行つたという。

マサノ叔母の日常会話を聞いていると比喩表現が多く、ことば造りをして座をおもしろくするところがあるが、祖母の影響だと思われる。

祖母は思いつくままに長々と書いた手紙のことを「おかるの文」と言った。（使い方の例は「お姉さんのおかるの文が何よりの楽しみです」フミエ叔母からマサノ叔母へ）

「一億万円」という名の料理があった。祖父の好物で、焙ったソラ豆の皮をむいで、きんたんのように甘くやわらかく煮たものであるが、あまりのおいしさに「一億万円」と名づけた。

「けけるの菓子」——「おばあちゃん、これ、（竹串にさした）サルのアメじゃないの。」「わしらは昔から「けけるの菓子」いうて言いよつた。」昔の子供仲間で作つたことばであろうか。

「せちめんこさげ」——この地方で使われた比喩表現らしいが、重箱の隅をはじくる人といった使い方をした。重箱の内側の六面をこさげても足りず七面をこさげるのか。

祖母は広島島の秋祭が盛上りに欠けるのを揶揄して「のっぺいちようちん」と言った。家々でのっぺい汁（八寸）を煮て、ちよ

うちんをぶら下げるだけだという意味である。ヤブ（鬼）が大勢出る龍王神社や、だんじり・軍船をくり出す吉浦八幡神社の祭を見慣れていると、からかいにくくなったのだろう。

昔はこのような短い印象的なことばが多く使われていたように、忠雄叔父は随筆「戻り燈籠」の中で「ポキン念仏」ということばを取上げている。

「私が小さいとき、母につれられてお寺参りをさせられていた頃「ポキン念仏」という言葉を聞いたことを今だに覚えていて。それはどういう意味かというと、人の畑のきゅうりやなすびをポキンと盗んではナムアミダブツ、なにをしてもナムアミダブツを称えれば救われる、これをポキン念仏といって、これではいけませんよ、ということであつたかと思う。

これは、絶対他力の宗教が逢着する一つの重要な問題だと思つが、親鸞自身、これが頭の痛い問題の一つであつたことがその書簡からも伺える。念仏者の放逸無慚なふるまいがあちこちに起り、世間の批判を浴びていたからである。親鸞は、常陸の信者にあてた手紙で、このことをいまして、

「くすりあり毒をこのめとさふらふらんことは、あるべくもさふらはずとぞ、おぼえ候」即ち、薬があるから毒をのんでもよい、というべきでない、とわかり易くさとしてゐる。」

若い頃作家を志したことのあるフミエ叔母は比喩表現がさえていて、人參・ホウレン草を「税金」（これは税金じゃけん、どうしても納めんにゃあいけん）とか、戦時中、くず湯を薄くのはしたものを「白いスープ」、買物好きの祖母を「買物大臣」とか

言った。祖母は着物などは質素だったが、東船場という大きな市場へ孫達をひき連れて買物に行くのは好きだった。藤製の小さな乳母車にスイカや皆のゆかたや下駄等を山と積んで帰った。

夜、こたつで話しこんで、母が「さあ、布団を敷きましよう」という段になると、叔母は「こたつの囲りに軍艦旗になつて寝ようや。」と言って笑わせた。これに似たものであるが、大勢で食事をしている時、「もんみょう講でいこうや。」ということがよく口にされた。大皿に漬物などが盛られ、取箸が添えられているのだが、食事が進み話はずむうちに、誰かが「もんみょう講でいこうや。」と言うとどつと笑いに包まれて親しさが増し、それぞれ箸で取るようになる。村の講中の集りの時、「無礼講でいこうや」といった意味で使われていたのだろう。

私はミスエ叔母が一番祖母の言語生活の影響を受けているように思う。口承文芸の世界である。

「この前の選挙のときは、お父さんが当選したら明るる日じゃあ死んでもええとまで思うたが、人間の欲望というものは限りのないものでねえ……」（昭和三十八年頃）感動的で説得力があり録音したいと思つた。抑揚・強弱が強く、自ら酔うようなフィリングがあるのは説教の影響であろうか。父たちは皆声が大きいい。叔母達の話方は非常にくわしく、会話を再現したり比喩を入れたりして印象深く話す。参考資料4の「ミスエ叔母の語り」は子供や知人によく話していた体験談であるが、私は「語り」としてとらえている。明治生まれの安芸門徒女性の語り方の具体例のように思う。

イツノ叔母は読み書く生活が広がってきている。三木露風・白秋・ツルゲーネフ・徳富蘆花の「自然と人生」等が愛読書だった。

くるくると水色の傘回しつつ

行く並木道家まばらなり

雑誌「女学生の友」に投稿したうたである。選者は西条八十であった。賞品として一年分の「女学生の友」が贈られた。

父は西田幾多郎の熱心な読者だった。(岩波書店・西田幾多郎全集第十八巻・八七四(S10・1・4) 佐藤真一宛書簡 昭和一九年二月にかけての他の書簡は空襲で焼失)

秀雄叔父は藤秀瓊選集八巻(法蔵館)を刊行し、仏教活動に力を注いでいる。忠雄叔父は著書を三冊出版している。1、「戻り燈籠」(教育出版一九七一年) 2、「画廊にて―現代絵画収集三十五年の軌跡―(書苑一九八四年) 3、「統画廊にて」(書苑一九八六年)

1、は参議院の記録部長時代に雑誌「日本の速記」の巻頭随筆を書いていたものを中心に「モダンテニス」「芸術新潮」などに書いた随筆をまとめたものである。2、は読売新聞の「生きる」欄、週刊朝日の「ひと本ひと」欄で紹介された。文章はわかりやすく具体的で比喩表現が多い。説教の影響もあるように思う。昔の説教僧は居眠りさせないように、わかりやすくおもしろく聞かせることに心を砕いたのであろう。

「永い間、銀座八丁、雀のように駆けめぐったが、やがて『あのよく絵を見にくるおじさんが最近ヒタリと来なくなったなあ』

といわれる日がくるであろう。」(「画廊にて」) 「絵はそれ自身、大勢の人に見て貰いたい、と望んでいる、と私は考えるのです。せっかくの名画が、隠居一人のなぐさみもので終わってはその絵は泣いているように思われてなりません。コレクションは時々公開し、多くの人に見て貰うのがコレクターのその絵に対する義務のように思います。」(「統画廊にて」)

七、参考資料―叔父・叔母・父の語りと文章―

祖父母の教えについて父の兄弟が書いた文章を集めてみた。

「母の宗教教育」は、宗教的な面が私の推測だけではつかめないで、叔父に書いてもらった。

祖父の「人の世はあっという間、短くはかないもの。急いで法を聞き永遠に生きる世界を求めよ。」とか、祖母の「人に生まれて一番大切なことは、この無常を悟って信仰を求めることだ。」ということばは、個人的な考えもあるうが、江戸時代末期の時代を覆っていた諦観、無常感であると思われる。

1、母の宗教教育

佐藤 秀雄

私の母は、八人の子供を産み育てて、毎日いそがしい日暮してあったと思うが、その中で夕方お寺の半鐘がきこえると、じっと

しておれず子供を背負って寺参りをしたようである。人間は死んだらどうなるか、その死が明日はわからぬはかないのちであることを、いつも真剣に考え、人に生れて一番大切なことは、この無常を悟って信仰を求めることだと小さい時から子供に話しかけていた。それには学校の勉強も勿論大切だが、同時に仏法を聞かせて貰わねばならぬが口くせであった。毎晩食事の前に仏前に参って父があげるお経（正信偈と御文章）には家族一同が参加して、正信偈は子供の時から暗記させられた。食事が済むとあとかたづけもそこそこにして、近くの西教寺はもとより市内の遠くの寺まで子供の手を引いてお参りした。

母の聞法は、今から考えるとよほど命がけて真剣に聞いたものか或は度々聞くのでその間に覚えたものか、聞かせて貰った話の内容を家に帰ってからも家族の者にあたかも手に取るように面白くわかり易く話して呉れた。これは子供にとってまことに有難いことであったと今にしてつくづく思うのである。同じ話の繰返しも多かったが、私共が子供の時に聞かされた母の話は、大人になっても忘れることがない。

母が亡くなる少し前に「親鸞聖人御絵傳」を私に渡し、この本はいままでも大切に子供に伝えるように言ひ残した。この本をわが子や孫に読んできかせているが、四・五歳頃が最も素直に又感銘深く聞くようである。この本の中に親鸞聖人が四歳のとき庭の樹の下に自分でつくった仏像を安置し、その前で合掌して称名念仏される可愛いお姿が、色彩美しく描いてあるのがよほど印象深かったとみえ、私の孫が木切れを持って来てこれになむあみ

だぶつと書いて呉れとたのむので、その通り書いてやると、それを持って庭に出て、樹の下にそれを立てひざまづいて合掌念仏していたのである。こういう小さい子には絵本で話して聞かせることが何より大切と思う。

この本はその次の孫にも又読んで聞かせたが非常に興味深く熱心に見て、いつも物語りの続きを読むように請求していた。又菓子箱のふたの裏側に自分で「なむあみだぶつ」とたどたどしい字で書いて、それを立てておがんでいたのである。それにつけても、小さい時から仏法を教えよとの母の念願のこの本は、わが家の宝として大切に子孫に伝えたいと思う。（昭和六十三年一月）

2、母のこと

佐藤 忠雄

私の母は学問はなかったが、滅法、法（仏法）にあつい人であった。子供としての私も、その方面の強い影響を受けている。

今でも、私は生きものを殺さない。私の殺すのは、人間の血をすっている最中の蚊ぐらいのもので、よく子供達に笑われる。彼らはワザと僕の前で害虫などを殺し、僕がイヤな顔をするのをジッと見て面白がるのである。子供達は害虫を焼いたりふみつぶしたりするが、私にはあんなことは出来ない。紙にくるんで坂の下にすてるのである。

子供の頃、郷里の山河を捜し廻って、女郎ゲモを捜し、それを庭で養い、ケンカさす遊びがはやったことがあった。自分のクモを大きく強くするため、ハエをとり、クモの巣にかけて食べさすのであるが、ハエを両手を払げて採ろうとしているところを母に見つけられ、コッピどく叱られたことがある。この印象はかなり強く私に尾を引いている。釣に行くといつて叱られたこともある。だから、私は今日でも、友人達と遊山に行き、山の中の養魚場などでみんなが釣を楽しんでも、私だけは釣はしないことにしている。

それなら魚を食べるのはおかしいではないか、という人があるが、それは不殺生戒を実践したことのない人の言うことで、私は魚は大いに食うが、自分から進んで魚を殺すことはやらないだけである。

母は十六歳の頃から、夕方村のお寺の鐘がゴーンと鳴ると「人間は死ぬるが死んだらどうなるか」ということが心配になって、お寺に説教を聞きにかけつけた、というから余程変わった娘であったのであろう。何が原因でそのような無常観にとりつかれたのか、今となっては問いただすすべはないが、何かあったに違いないことは想像に難くない。

私達の三つ四つ頃の印象は、殆んど毎日のように母の背におんぶされてお寺に参った、その印象である。説教が終って寝ているのを起され、おんぶされて帰る、その母の背中のあたたかい感触や、母が歩きながら今聞いた法話の感動したところをひとりごとのように物語るのを耳にしながらも、物凄くねむかった記憶は五

十数年経った今日でも忘れられるものではないのである。

母の法にあつかったことは、郷里の近辺でもかなり有名であったから、近所に臨終の人があるとよく母を呼びに来たものである。「お浄土に参らせて貰うんじゃけん、心配せんでええ、とひとこと言つてやつてつかあさい」と近所の人が頼みに来たものである。母はそんな時、家に帰つてきて着物を着替えながら「人間もあんなっちゃもう遅い。だから元氣なうちに法をきかんにゃいかんようの」と淋しそうに私達に言つたものである。

(随筆「戻り燈籠」)

3、ノンキな母さん

森本 イツノ

遠い昔のことである。祭で実家に帰った夜、寝床をとるのが競争だった。「お宅は木賃宿ですの。うちはホテル代払つとりますけん」と動作の早い姉は絹ぶとんを客間に敷いて、私をくやしがるせた。

私は押し入れからシマの木綿ぶとんを引っぱり出し、中間の母のそばに床を敷き、「なんぼ年とっても母さんのそばはええのう」と寝ころんだ。今夜はなんだか広いようだと思つたら「ありや、赤ん坊は？」と母。門の外の乳母車の子をてつきり母が内に入れてくれたとばかり思っていた私は、あわてて飛びだした。

見ると、折からの十六夜月に照らされて赤ん坊はスヤスヤ。

「歌人蓮月尼は宿貸さぬつれない人の情で、おぼろ月夜に下伏したが、この子はノンキな母さんのおかげで、赤ん坊のくせに十六夜月の下伏しをやったんじゃけん、大きゅうなったら有名な歌人になるよ」と負け惜しみを言ったが、母からは「このノンキ者が」とたいそうしかられた。もっともこの子は現在、歌人どころか、おおよそ無風流な銀行屋になって札束を数えているが。

母は、私たち八人の兄弟姉妹を、いつも一人っ子のように大切に育ててくれた。働き者の母は私のノンキさが気がかりだったらしい。(昭和四十八年)

4、ミスエ叔母の語り

(桐原武子「我が母・その思い出の記」より)

賀谷 ミスエ

それは私がやっと四歳を数えた昭和十九年のことでございます。日本の情勢は風雲急を告げる時でございます。三番目の兄も学徒出陣という形で軍隊に入隊しておりました。

ある寒い冬の早朝でございます。母は乏しい物質の中から息子の為に揃えた品を自分の肩に背負えるだけ詰め込んだリュックサックを背に広駅をたちました。ところがやっと山口の連隊に着いてみれば、息子の所属する部隊はその日の未明、九州方面へ向けて下ったと聞かされ、「泣くにも泣けぬ気持ちだった」とその時の模様をよく話しておりました。ここで泣く泣く広へ帰ってしま

ったのでは何のことはありません。しかし一度子供のこととなると、どこにそのようなすさまじいばかりのエネルギーが潜んでいるのかと思われる位、直向な母のことでございます。山口駅へひき返し、「私は広島県の広から息子に会うために山口連隊までやってまいりましたが悲しいことに、今朝未明息子の部隊は九州方面に移動したそうで、今ここで別れたらもういつ会えるか知れません。どうか切符を一枚分けて頂けないでしょうか。」と頼みましたところ、切符一枚買うのも長蛇の列を作らねばならなかった当時のことです。ですから職員にはどうする事もできません。

その時、切符を求める列の前の方にいた人が、「私はこれから郷里に帰るため切符を求める者ですが、どうぞ私の切符で貴女の息子さんに会いにお行きなさい。」と言ってその切符を母に与えて下さったのだそうです。母はその時、「あゝ有難い。神仏並びに今はなき佐藤のお父さんお母さんが守って下さったのだ」と心の中で合掌したと申しておりました。後年になってその時切符を譲って下さった何処の誰とも知れぬ人に深く感謝し、どうぞあの方が幸せでありますようにと祈っておりました。

こうしてやっと汽車には乗ったものの、すべて秘密で通していた軍の取り決めで「九州の何処へ行ったのでしょうか」と尋ねても、正確なことは知らせてもらえず、ただ漠然と九州方面とのみ知らされたのですから、一体どのあたりであろうかと思案に暮れておりますうちに汽車は下関に着きました。この時もやはり神仏の御加護があったと申すのでございましょう。下関で下車しよう

か博多まで行くかかと迷ったけれど、母はふと博多で下車してみようという気持ちになり、夕闇迫る博多駅のホームに下り立ったのだそうでございます。博多駅の窓口にまいるまして「ちょっとお聞き致しますが、今日この駅に山口の連隊から来られた一団はありますかでしょうか。」と尋ねますと「あゝありましたよ」という返事が返ってきたそうです。

母はもう心も躍る思いで、息子はこの街に在るに相違ない。この街を探して見ようと思ひ駅を出ました。少し行きますとカッカッカッカと軍靴の響きを耳に致しましたそれで、もしや我が息子の所属する部隊ではなかるうかと重い荷物を背負つてその隊列を追いかけやうと追いついて、「この部隊に賀谷倭登は居りませぬでしょうか。」と尋ねますと、

「賀谷君はここには居られません、賀谷君の隊は日の出旅館に宿泊してあります。」と知らされ、嬉しさの余り母はその旅館目ざしてひた走りに走つたと話しておりました。

驚いたのは兄でございます。山口を何時たつとも、又何処へ行くとも書き送つた覚えはないのに、目の前に母が立っているのですから。母はその夜のうちに兄の持物のなから繕ひを必要とするものは全部繕ひ、新たに携えてきた品には縫ひ取りの名前を入れ、母親として成し得ることは総て成し遂げた後、白々と明け初める東の空に向つてこれで良いもう心おきなく息子を戦地へ送ることが出来る。神仏、佐藤のお父さんお母さん有難うございましてと御札を述べ両手を合せたと申します。

兄の一隊は博多港から御用船で釜山に渡るということで、母は

博多港まで隊を追つて息子と行動を共にしようと考えたそうでございますが、兄の「お母さん、何処まで行つても別れば別れだから、ここで別れよう。家へ帰りなさい」という一言に「それもさうだと思ひ博多港までは見送らず途中で別れをつけたのです。だけれど本当に神仏の守りがなくて、どうして行く先も定かでない息子に会えたであらうか」と申し、この事があつてから後、母はいよいよ信仰を深めたようございました。

5、手紙

佐藤 真一

① 父恩深重

よき父に恵まれ、よき母に恵まれ、私ら八人の兄弟姉妹はほんとうに幸福な一生でした。前世の因縁の恵というより外ありません。

二十二年で死別と知らずにひたすら淑子を可愛がっている父の私を助け補つて下さつた私の父をほんとうに有難いなあと思ひます。その姉を負うて妹を歩かせると母から叱られたものですが、父は一言も私に注意せず黙つて信子ちゃんを可愛がりギョウセン飴をハシに丸めつけて、ひそかに食べさせて下さつた。その母親のようなひそかな配慮を有難く思うのです。(中略) 私はおしゃべり屋。これは母の系統をひく。私の父は口数の少ない人であつた。(以下略) 真一七十二歳(S42・6・23信子姉宛)

② 秀雄叔父宛の手紙「新邸落成に際し亡き人々の靈位に告げ喜びを共にす」より

「いつの間にかは年老の積もるらんとも覚えず知らざりき……よく縁側で繕い物をしながら法文を暗誦して念仏していられたね。あなたは生來頭のよい小さい時から学問のよく出来る子として吉浦村に存在を知られ郡長さんからほうびを貰われたと聞いています。人間性もよい御方でしたね。若い時から求道に熱心で「今死んだらどうするか」と世事は捨てても間法に精進されました。うちの八人の兄弟姉妹は皆あなたの背中に負われてお寺に参ったものです。兄さんはその中でとてもおとなしくしていて同行達が「この子は感心な子じゃ」と賞められていたとあなたは語っていられました。夕方早々に食事を片付け子供を負い手を引いて西教寺は勿論、岡城川原石神原を遠しとせずして聴聞に熱中せられました。寺参に文句を言われなかったしゅうとがありがたいと平素言っていたらね。(中略)

亡母の話術の巧妙さ

父の名は何といやるかえ……阿波の徳島十郎兵衛 母の名はお弓と申します……巡礼おつるの哀話を何十遍聞いたが、いつも話真に迫り限りなき感銘を受けた。過去の記憶を語られる時も掌に物を指すごとく明らかであった。頭脳明晰で記憶よき人の過去の思い出を聞くのは楽しいものである。真一六十七歳 (S 38・12・18)

八、おわりに

祖父祖母の家庭における言語教育をふり返ってみると、今日とは異なった意味で、かなり多彩な言語環境が用意されていたことに気づく。それらは伝承の世界を引き継ぎ、あるいは人生経験を通してつかみ取られた格言もしくは格言めいたことはであり、生き生きとした描写で語られる説話であり、抑揚に富んだあそび歌などであった。

それらは一方で多彩な言語能力を育むもとなつたと思われるが、同時にそれらは人間の生き方を教えるものでもあった。安芸門徒の生き方を柱とした家庭教育は子供達からだに自然にしみ込み、その後の生き方を支える柱ともなっていた。

ここに報告した一連のことがらが国語教育の民俗的研究への一資料ともなれば幸いである。